



頂上より

10月9日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

10月9日のおはなし「頂上より」

ハローハロー聞こえるかい？ ぼくだよ。そっちの声は残念ながら聞こえない。ここはね、意外と天気がいい。ぼくの真上には青空が広がっている。青空と言うよりも宇宙と呼びたいような怖いような深い濃紺の空だ。ぼくは世界でいちばん高いところにいて、ぼくより上には何もない。これは気分のいいものだ。足元のほとんどは雲に閉ざされて何も見えない。いくつか見えるのはローツェとカンチェンジュンガ、頂上からはチョーオユーも見えた。

さっきは君の声がはっきり聞こえたよ。日本とネパールで話しているとは思えないくらいクリアに聞こえた。ちょっとタイムラグがあるのがそれっぽくておかしかったね。大したもんだ、衛星通信というのは。確かに、うん、ここまでくると人工衛星の方がどんな電話会社の基地局よりも身近に思えるよ。手を伸ばせば触れるくらいさ。ほらすぐそこの人工衛星にならぶら下がるかもしれない。冗談だけどね。

うん。酸素はもう最後の分がちょっと前になくなっちゃったけどね。ぼくの頭はびっくりするくらい冴え渡っているよ。いま君がぼくをどのくらい欲しがっているかわかるくらいだ。いまぼくがどのくらい君を欲しがっているかに比べるとちょっと足りないけどね。いまここに君がいたらマイナス40度でも関係なしに全部ひんむいて愛し合ってしまうと思うよ。ああ。こんなことを言っちゃいけないね。お腹の中にいる、ぼくたちのかわいい6カ月のベイビーの前で。

君の腕の中にやっぱりケンタはいるのかい。ケンタに会いたいよ。あいつの笑顔をもた見たいよ。ぼくの顔を見て笑うんだぜ。ぼくがただ顔を近づけただけでニヤリってさ。とんでもなく嬉しい人に思いがけず会ったみたいにニヤリってさ。あんな笑顔で笑われたことあるかい？ 人生を通じてさ。あんなに無防備で開けっぴろげな笑いで認められたことがさ。あなたに会えて良かった、こんなに嬉しいことはないって。

食糧のことを聞いてたっけ、さっき？ 幸いなことに食糧はある。まだ数日分。でもね。水がないんだ。こんなに雪と氷が沢山あるのにね、冗談みたいだろう？ でも残念ながら冷たすぎて水にはなってくれないんだ。マイナス40度では凍ったままなんだ。だからぼくはもうあんまり上手にしゃべれない。しゃべれないし、しゃべれないしね。うん。水がないということは食糧がないよりもちょっと深刻なんだ。ああ。ええと。ちょっとというのは違うな。

いい加減なことを言いたくないからちゃんと先に言っておくとね、ぼくが置かれた状況はあんまりかんばしくない。諦めた訳じゃないよ。ぼくは最後まで諦めない。諦めるもんか。ケンタの笑顔を見て君を何度も抱きしめるために戻ることを諦めはしない。でもね。風がやまないんだ。ヒラリーステップを降りることもできない。こんな高いところで足止めされるなんてどうかしていると思うよ。本当にどうかしている。でもどうにもならない。降りようとしたら吹き飛ばされて一巻の終わりだ。風がやむまで待つしかない。

それからね。ベースキャンプの連絡では、すぐそこに見える雲の下は吹雪きまくっているらしい。ここはこんなにいい天気なのにね。日焼けして痛いくらいなのにね。ぼくのすぐ下で太陽をいっぱい浴びて純白に輝いているあの雲の下は大荒れなんだそうだ。信じられないよ。マッシュマロみたいにはくぱく食べられそうにうまそうな雲なんだぜ。まあ、いまのぼくはそんなに食欲はないけどさ。3分おきに吐きそうになってるけどさ。

ええと。違うよ。飲んでるわけじゃない。そういう吐き気じゃない。あのころはよく飲んだよな。君にいつも怒られたっけ。でもぼくはみんなが集まって酒を飲むのが好きだったから。だいたい君がいけないんだぜ。ぼくの気持ちを知っているくせにあんなやつと親しげに話したりしてさ。あれは何の映画を撮っていたときだっけ。主演をやったあいつ、何て言ったっけ。名前が。出て来ないな。あの時もぼくはね、ファインダーを覗きながらもどかしくて胃が痛くなりそうだった。

どんなワンシーンも忘れていないよ。覚えている。ワンカットワンカット。映画だけじゃない。君の全てを。ほら、あそこ。三角公園で撮ったろう。暑い夏の日だった。ぼくは心に決めていたよ。撮影が終わったら伝えようってね。君に。ぼくの気持ちを。犬がいたね。大きな犬だ。レトリバー。ボルゾイ。セッター。休憩時間にはマックを買いに行った。一緒に。あの時、監督に怒られたね。ぼくがふざけすぎたから。それから。それから。フィルムを買いに行った。ひとりで。フィルムが足りないからって。新宿まで。あのかっこうで。野球帽。スタジャン。デザインは君だった。絵コンテの表紙に描いたよ。君がつくったあのロゴ。マネしてね。フィルムを買って戻ったら。戻ったら君がいた。駅まで迎えに来てくれてたんだ。いまでも見える。日傘。足元にくっきり落ちる影。木綿のワンピース。

(「木綿のワンピース」 ordered by オネエ-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるのですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

頂上より

<http://p.booklog.jp/book/35124>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35124>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35124>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.